

「子育て支援」の前に「子育て支援」を

遠藤 利彦

(東京大学)



The Center for
Early Childhood Development,
Education, and Policy Research

<https://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/>



東京大学大学院・教育学研究科附属

『発達保育実践政策学センター』

Cedep

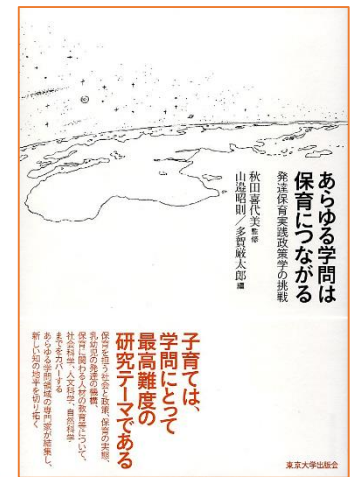


The Center for
Early Childhood Development,
Education, and Policy Research

<https://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/>

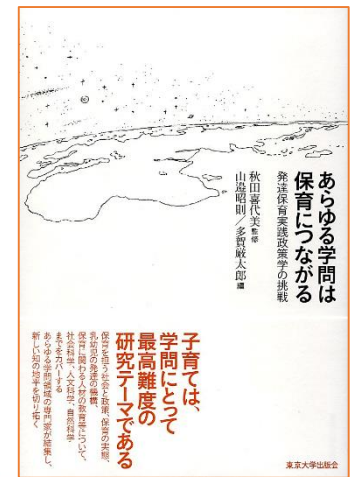
発達保育実践政策学センター (Cedep) とは

- 2015年7月に設立された、乳児期からの
保育・教育を研究する研究機関



発達保育実践政策学センター (Cedep) とは

- 2015年7月に設立された、乳児期からの保育・教育を研究する研究機関



- 乳幼児の心身発達・家庭内外の生活環境に関する縦断的な大規模パネル調査と小中規模サンプルでの観察・面接調査
- 保育者の保育スキル・実践知と職場環境等に関する調査

子育て・
保育研究

発達基礎

- 乳児の睡眠・食事・外界や他者との相互作用等の基盤となる脳、身体、行動の仕組みの解明
- 実践における基礎科学知識の提供・流布

子どもの育ちを支える
より良い環境とは何か？

国内研究



国際研究



- 国内外の乳幼児保育行政政策に関する比較調査研究
- 知の集積とデータベース運用
- 政策提言

政策研究

人材育成

- 乳幼児保育を社会システムに位置づけて政策へ連結
- 人材育成プログラム
- 各層の人材の輩出・テム



センターのウェブサイト

<https://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/>

- 「子育て」支援の前に「子育て」支援を！
- 「子育て」支援（保護者支援）＝家庭の養育機能回復・向上を通して、「子育て支援」（子どもの発達支援）を充実させるという道筋だけでは、もはや立ち行かない事態が生じてきている
- 子どもに直接、届く形で「子育て支援」を高度に支え促す方途の拡充こそが喫緊の課題
- その方途の開拓・充実において、園および保育者が果たす役割はきわめて大きい
- 乳幼児期からの家庭外での経験の充実が、生涯の土台たる「非認知的な心」の発達の鍵

ヒト本来の子育ての形は「集団共同型養育」

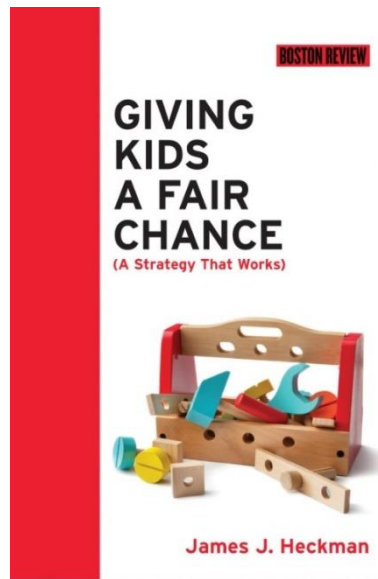
- ヒトの子どもはきわめて脆く、しかも重たく生まれつく
- 「乳児期」(哺乳期)の後の「子ども期」がきわめて長い
→ 養育負担の増大・長期化
ヒトの子どもは手がかかる、長きに亘って手がかかる
- 母親単体での養育は生物学的に見て土台、無理
→ ヘルパー・サポーターの絶対的必要性
→ 「繁殖協力」/「集団共同型子育て」の進化
- ヒトの子どもは本来、多様な他者からなるネットワーク
(多層のセーフティネット)の中にあって健全に発達
- ヒトの子どもは元来、複数の他者からのケアに適応

- **果たして現代の日本の子育ては？**
- 男女共同参画・「イクメン」・子育て支援・保育の拡充・・・
- しかし、未だに「母子関係中心主義」が根強い
ヒトの歴史の中では最近の文化的産物なのに・・・
不当な“母親非難”も依然として多い
「母原病」概念は未だ遠い過去のものとは言えない・・・
- 子どもの発達に大きなダメージとなるのは、母親などの
特定養育者一人の機能不全では必ずしもなく、多様な
他者から成るサポートネットワーク全体の機能不全
- 現代の事情に適った「集団共同型子育て」の再生を！
父親の育児参加のあり方を見直し・さらなる拡充
保育等施設を核とする社会的ネットワーク作り・・・

- 本来、「**集団共同型子育て**」は、血縁・非血縁者との多様な関係性に支えられていた
- タテ_(対大人)の関係/ナナメ_(対異年齢)の関係/ヨコ_(対同年齢)の関係
- **集団社会化理論**：子どもは濃密な子ども同士の集団生活の中で「同化」と「差異化」を経験
- 「**同化**」→社会のルール・常識・慣習・文化等を習得
- 「**差異化**」→自身の個性を自覚し、独自の可能性を模索
- 現代日本→少子化・家庭の孤立化・遊び場の減少・・・
- とりわけ乳幼児段階の関係性の希薄化が深刻
→意図して多様なタテ/ナナメ/ヨコの関係性を子どもが経験できる場と機会を設ける必要性→未就園児への対応も含め、今後、**園が果たし得る役割は大**

● 「非認知的な心」の大切さ

- 世界各地で展開される長期縦断研究→発達早期に基盤形成される「非認知的な心」とそれを支え促すアタッチメントを核と高質なケアの枢要な役割を示唆
- 「非認知的な心」＝社会情緒的スキル＝自己と社会性の力
→経済的安定性なども含めた生涯に亘る心身の健全・適応性やwell-beingを予測
→貧困から被り得る様々な悪影響に対するバッファ
- 「非認知的な心」→主に感情の当事者である際の子どもへの周囲の大人の関わりと、子どもの自発的な遊び/学び(一人遊び・集団遊び)の中で醸成される



Heckman, J. J. (2013)
Giving kids a fair chance.
The MIT Press.



ヘックマン, J. J. (2015)
『幼児教育の経済学』東
洋経済新報社

ジェームズ・ヘックマン(労働・教育経済学:2000年ノーベル経済学賞)

- ・子どもに対する教育投資効果→乳幼児期への投資が最も効果的
- ・就学後の教育の効率性を決めるのは、就学前の子育て・保育の質
- ・乳幼児期への投資は大人になってからの15～17%の利益還元に通じる
- ・ペリー就学前計画:乳幼児期の保育が40歳時の経済状態・幸福を分ける
- ・特に恵まれない環境にある子にとって乳幼児期の保育はきわめて重要
- ・それは「認知」以上に「**非認知**」能力を促すことを通して生涯発達に影響

◇家庭外の大人との関係性・経験→「非認知」=自己と社会性の発達を補償

- OECDレポート(2015)が掲げる「非認知」
“Skills for Social Progress : The Power of Social Emotional Skills”
- 「認知」「非認知」スキルが予測する多様な心理社会的適応
- 所得は「認知」だけでは説明され得ない→「非認知」の重要性
- 「非認知」→「認知」の因果関係は“robust”: その逆因果は×
- ターゲットとする「非認知」=「社会情緒的」スキル
- 個人および社会における生産性への寄与が期待されるもの・成長可能性が見込まれるもの・測定可能なもの
- 「長期的目標の達成」 / 「他者との協働」 / 「感情の管理」
- 「スキルがスキルを生む」(Skills beget Skills)
- 殊に社会情緒的スキルの土台を就学前期に築くことの重要性
→ “Starting Strong” 「人生の始まりこそ力強く」

自己と社会性の力≡「非認知」

- **「自己」にかかわる心の性質**（基盤としての自己信頼）
（自分を大切にし、適切にコントロールし、もっと高めようとする力）
「自尊心/自己肯定感」・「自己理解」・「意欲/内発的動機付け」
「自己効力感」「自制心/グリット」・「自立心/自律性」 など
- **「社会性」にかかわる心の性質**（基盤としての他者信頼）
（集団の中に溶け込み、人との関係を作り維持していくための力）
「心の理解能力」・「コミュニケーション力」「共感性/思いやり」
「協調性/協同性」・「道徳性」・「規範意識」 など
- 両側面に関わる**「感情の制御・調節」**
（異時点間選択のジレンマ / 自他間選択のジレンマ 解決）

Education 2030

(OECD)

『“vuca”な世界を生き抜く力』

Volatility(激動)

Uncertainty(不確実)

Complexity(複雑)

Ambiguity(曖昧)

Agency(責任主体性) / Co-agency(共同主体性)

[自己に関わる心の力] / [社会性に関わる心の力]

● 子どもの発達と教育をめぐる世界的動向

(発達心理学・小児科学・幼児教育学・教育経済学・OECD諸国の教育政策……)

- 見直されつつある「乳幼児期」の重要性
- 生涯発達の土台形成：高度な学校教育も確かな「土台」の上に積み上げられてこそ益をなす
- 見直されつつある「非認知」の大切さ
- Well-beingに至る基礎工事＋「認知」「学力」も「非認知」の支えがあってこそ確実に伸張する
- 「非認知」の中核→自己と社会性の心の力
- それを育む揺りかごとしてのアタッチメント

- 「保育」= “care”^[養護] and “education”^[教育]
- 「養護」と「教育」の表裏一体性
- 乳幼児期における「養護」と「教育」は相互独立のものであってはならない→ 高質の「養護」こそが、そのまま「非認知的な心」の教育にもつながる
- 「養護」→子どもの心身の安全・安心を保障すること
→その中核にあるのがまさに**アタッチメント**
- 大人は「**安全な避難所**」として子どもの心身をケアし、
また「**安心の基地**」として自発的な遊び/学びを支える
- 子どもは「**安心感の輪**」を安定して回る中で、自他への基本的信頼感をベースとする様々な「**非認知的な心**」を身につけることができる

- 乳幼児期に固有の「教育」とは
- 質の高い「養護」を通して、人の生涯に亘る心身の健康や幸福の「基盤」をしっかりと築くこと
- その「基盤」≡ 非認知的な心の力
≡ 自己と社会性の力
- ややもすると私たち大人は、短期目線で、乳幼児期から、子どもの頭の中に既にどれだけの「(特に認知的な)コンテンツ」が備わっているか(何ができているか)に目を向けがち
- しかし、より大切なのはもっと長期目線で、これから先、子どもが、自分に必要な「コンテンツを自分で探し・集め・創る(非認知的な)力」を養うことのはず

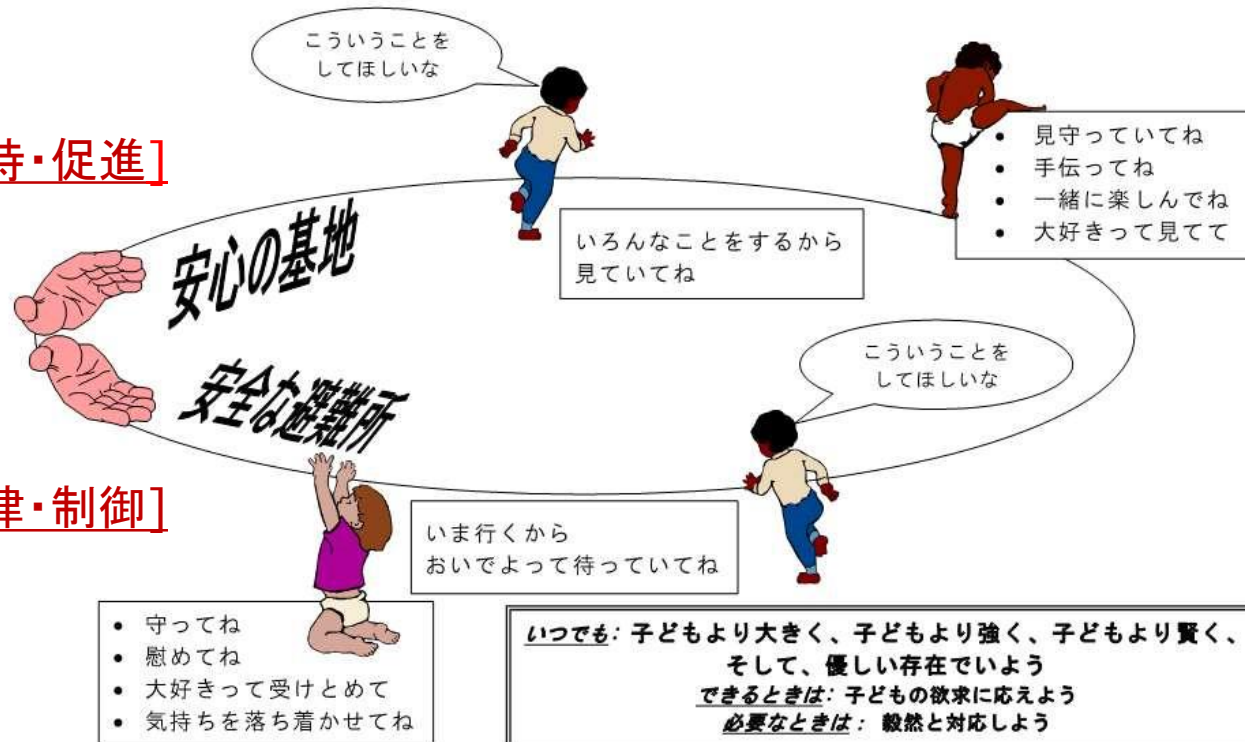
安心感の輪

Circle of Security®

子どもの欲求に目を向けよう

[探索の支持・促進]

[感情の調律・制御]



Web page: Circleofsecurity.org © 2000 Cooper, Hoffman, Marvin & Powell (北川・安藤・岩本訳、2013)

物理的に「くっついていないこと」そのものよりも
「いざとなったらいつでも戻ってくっつける」という感覚の重要性

『安心感の輪』

…→ 危機との遭遇

→ ネガティブな情動経験(恐れ・不安・欲求不満等)

→ 「安全な避難所」への近接(アタッチメント)

→ ネガティブな情動の調節 / 情緒的燃料補給

→ 「安心の基地」からの探索・遊び

→ 危機との遭遇…

● この輪がいかに自然にかつ確実に機能し得るか

→ 子どもの健やかな心身の発達のカギ

● 子どもの成長＝徐々にこの輪を広げること

「一人でいられる時間」の拡張

「避難所」: 感情を立て直す / 「基地」: 探索を促す

- ・ **「安全な避難所」**としての大人の役割
- ・ 崩れた感情に寄り添い、共感的に受け止め、それを言語化する
→ **心の理解能力・共感性・思いやり...**
- ・ 崩れた感情を立て直し、安心感を回復させる
→ **自分や他者への基本的信頼**
「自分には愛してもらえる価値がある」「他人は信じていい」
→ **自律性・心のたくましさ**
「何かあったらあそこに行けばいい」という見通しに支えられた自発的な探索や冒険・新しいものへの挑戦

・「安心の基地」としての大人の役割

- ・ 安心感を得て、元気になった子どもを自分のところに留めておくのではなく、その背中を押して、また一人で探索や冒険に向かって行けるように応援し、離れたところから見まもってあげる
 - 自発性や主体性・意欲や内発的動機づけ・自己効力感・・・
 - 自律的・自発的な発見・探索を通した「学び」

「非認知」の発達を支え促す大人の役割

- アタッチメントの対象（随伴的な応答者）

基地・避難所として子の感情を調律 / 制御する

- オープンな感情風土の醸成者

温かな関係性・感情風土を醸成する（←大人の心の健康）

- 感情のコーチ（Emotion Talk）

感情の聞き役・語り部・指南役となる

- モデリング/社会的参照の支持促進者

自ら「非認知的な心」のモデル/参照枠となる

- 子ども同士の遊び/学びの見護り役

「黒子」「応援団」として楽しい遊び/学びを支え促す

etc.

- 子どもは大人との関係性の中だけで育つ訳ではなく、子ども同士の関係性の中でたくさんの心の要素、とりわけ「非認知」を身につける
 - 大人の役割は、自身が子どもに直接、何かをしてあげることだけではなく、子ども同士の関係性および遊び/学びを支え促すことでもある
 - 「安全な避難所」と「安心の基地」の2つの役割をバランスよく果たし、子どもが「安心感の輪」を安定して回れるように心配りする
- 子どもが情緒的に利用できる存在であること
- 「黒子」と「応援団」として関わることの大切さ

- 乳幼児期をただの「準備教育」に当ててはならない
- 乳幼児期だからこそ(ならでは)の養護/教育が「生涯発達の土台形成」に通じる
- 確かな「避難所」と「基地」としての保育者の専門性を再認識する必要性
- 子どもは他者との社会的相互作用の中で育つ
- (他者が介する)物理的環境との相互作用の中で育つ
- この2種の相互作用を豊かに可能ならしめるスペシャリストがまさに保育者
- 地域の「子育て」支援の中核としての園の再構築
- プロセスの質向上を図る効果的な保育者研修の実現
- 保育・幼児教育を生きがいのあるライフワークとして魅力的な仕事に高めていくための政策展開

● 米国NICHDによる大規模縦断研究

- 早期からの保育所入所の有無それ自体は子どもの発達に差をもたらさない: より重要なのは、早くから入所した場合に子どもが経験する保育の質がいかなるものであるか
- 短期間での頻繁な通園環境の変化・質の低い保育・長時間保育等が、殊に家庭内での親の低い敏感性と組み合わさった場合に、子どもの発達に負の影響が及ぶ
- 観察ベースで多面的に捉えられた保育の質(子の正負様々なシグナルへの敏感性・子の活動へのポジティブな注視・子の認知活動の促進・子の活動への非侵害性など)が、子が成長し、児童期・思春期になった時点での認知・学業水準や外在化問題行動(他者への攻撃性等)の低さなどを予測
- 英国におけるEPPE, EPPSE, REPEY、SEED調査→質の高い保育("Sustained Shared Thinking"等)がその後の子どもの認知・非認知両側面の心的発達に正の効果